

令和7年度

大阪大学

人文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 人文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和8年6月

目 次

はじめに

教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科准教授） 多 賀 良 寛 1

1 演劇関係

兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）劇場制作研修概要

人文学研究科講師 伊 藤 寧 美 2

劇場制作研修 受講生のレポート①

文学部人文学科演劇学専修3年 舟 木 莉 音 3

劇場制作研修 受講生のレポート②

文学部人文学科 演劇学専修4年 佐 藤 夏 那 9

はじめに

本報告書は、令和7(2025)年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロ劇場〉(演劇学) 学部生 5名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導して下さった受け入れ機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成16年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは平成18年度である。平成18年度～令和6年度の18年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は26年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。参考のために、平成18年度～令和7年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	0	6	1	2
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	0	3	0	5
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	2	1	3	3
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	-	-	-	-
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	2	10	4	10

	R4	R5	R6	R7	計
音楽	7	6	0	0	70
演劇	3	4	8	5	69
美術	0	5	0	0	23
映画	-	-	-	-	7
小計	10	15	8	5	169

* 単位修得を目的とせず、インターンシップに参加した学生の数を含む

教育支援室インターンシップ専門委員(人文学研究科准教授) 多賀良寛

演劇学関係インターンシップ概要

人文学研究科講師 伊藤 寧美

演劇学研究室では、「劇場制作演習」として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2025年度は、兵庫県立ピッコロ劇団第83回公演『火のようにさみしい姉がいて』（作：清水邦夫、演出：眞山直則）を題材に、9月30日から10月3日の4日間にかけて実施した。

9月29日に事前オリエンテーションを行った。授業担当教員（永田靖兼任教授）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説した。同時に今回の研修についての必要な姿勢と考え方について述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを説明した。

授業の狙いは、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日（もしくは楽日）を制作として研修することである。また演劇上演の現場に触れながら、どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか、作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか、ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか、そして観客は作品をどのように受け取っていたかなどについて現場の体験を通して学ぶことにある。これらのことを通して、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことが目的である。

受講生は、9月30日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。仕事の内容は主に制作面での仕事である。広報、観客席廻り、ゲネの手伝い、観客受入準備とその対応、上演後の片付けなど様々であるが、併設するピッコロ演劇学校の授業参観やスタッフのレクチャーも受ける。その後、9月30日、10月1日の上演には場内整理や制作業務を研修する。それらを通して演劇公演という「出来事性」についてその一回性、反復性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、受講生は報告書を提出する。授業担当教員はそれらによって成績評価を行う。報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

演劇学演習（劇場制作研修）インターンシップレポート

文学部人文学科演劇学専修3年 舟木莉音

【研修先】

兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロシアター〉

所在地：兵庫県尼崎市南塚口町3丁目17-8

【期間】

2025年9月30日（火）～10月3日（金） 計4日間

9月29日（月）にオンラインでの事前オリエンテーションあり

【研修先概要】

1978年、青少年の自由な創造活動を促進し、県民文化の高揚を図ること¹を目的として開館した。県の条例により、財団法人兵庫県芸術文化協会が劇場の指定管理者として指定を受けている。また人材育成のため、1983年に「ピッコロ演劇学校」、1992年に「ピッコロ舞台技術学校」が開校された。さらに1994年には劇場付属の「兵庫県立ピッコロ劇団」が設立された。これは全国で初めての県立劇団であった。劇場・劇団・学校が揃った公立文化施設は国内唯一である。「地域が芸術でつながり誰もが生きやすい社会を作る」という運営方針のもと、三位一体で①創造発信、②交流連携、③人材育成、④地域創生に取り組んでいる。

◆施設・設備

- ・大ホール（396席、オーケストラピットを使用する場合は288席）
- ・中ホール（定員200名）
- ・小ホール（定員100名）

ほか楽屋・練習室・資料室（舞台芸術に関する書籍や上演台本・資料等を収蔵）

◆主な受賞歴²³

¹ ピッコロシアターについて、兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアター、<https://piccolo-theater.jp/guide/about/>（最終閲覧日2025年10月30日）

² 同上

³ 当日配布資料を参照

- 1988年 第10回サントリー地域文化賞〔ピッコロシアター〕
- 1991年 第45回神戸新聞奨励賞〔ピッコロシアター〕
- 1992年 第32回久留島武彦文化賞〔ピッコロ演劇学校〕
- 1998年 平成9年度（第52回）文化庁芸術祭賞〈演劇部門〉優秀賞
〔ピッコロ劇団 第7回公演「わたしの夢は舞う―會津八一博士の恋―」〕
- 1998年 第32回紀伊國屋演劇賞団体賞〔ピッコロ劇団 第6回公演「風の中の街」〕〔ピッコロ劇団 第7回公演「わたしの夢は舞う―會津八一博士の恋―」〕
- 1998年 平成10年度尼崎市民芸術賞特別賞〔ピッコロ劇団〕
- 2005年 JAFRA アワード（総務大臣賞）〔ピッコロシアター〕
- 2008年 平成19年度（第62回）文化庁芸術祭賞〈演劇部門〉優秀賞
〔ピッコロ劇団 第29回公演「モスラを待って」〕
- 2014年 平成25年度（第68回）文化庁芸術祭賞〈演劇部門〉優秀賞
〔ピッコロ劇団 第47回公演「間違いの喜劇～現夢也双子戯劇～」〕
- 2019年 ひょうごユニバーサル社会づくり賞団体部門〔ピッコロシアター〕
- 2021年 令和3年度（第76回）文化庁芸術祭賞〈演劇部門〉大賞
〔ピッコロ劇団 第71回公演「いらないものだけ手に入る」〕
- 2022年 日本アートマネジメント学会賞〔ピッコロシアター〕
- 2024年 草の根国際功労賞〔ピッコロ劇団〕
- 同年 令和6年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰
内閣府特命担当大臣表彰優良賞〔ピッコロシアター・ピッコロ劇団〕
- 同年 第3回関西えんげき大賞 優秀作品賞〔ピッコロ劇団 第80回公演
「宇宙に缶詰」〕

【研修中の公演概要】

兵庫県立ピッコロ劇団第83回公演「火のようにさみしい姉がいて」

- ・会場：ピッコロシアター中ホール
- ・公演期間：2025年9月27日（土）～10月2日（木）
- ・作：清水邦夫
- ・演出：眞山直則（ピッコロ劇団）
- ・上演時間：約2時間
- ・料金：一般3500円、大学生・専門学校生2500円、高校生以下2000円

【研修内容】 ※時程はおおよそのもので、不正確な場合がある。

◆1日目

14：00～15：30 館内見学、資料室・学校等についての講義

16：00～17：00 日常業務体験

18：30～20：30 「火のようにさみしい姉がいて」観劇

1日目のはじめに、業務部の木屋村様にご案内いただき、大ホール、小ホール、書庫・閲覧室、事務室を見学した。ピッコロシアターのホールは使いやすさに定評がある。特に大ホールは舞台の奥や袖が広々としており、人の移動が激しく大道具や機材も多い舞台公演を行うにあたって非常に便利な設計であった。舞台・音響・照明のスタッフ各1名が常駐している点も使用者にとって安心材料になるだろう。演劇で使われることの多い大ホールが音の反響を抑えた構造であるのに対して、ピアノの発表会など音楽の用途で使われることの多い小ホールは反響が豊かであった。リノリウムの床はダンスにも適しており、多様な目的で使用されているようだ。書庫・閲覧室は舞台芸術に特化した専門図書館の役割を果たしている。書庫には演劇に関する書籍・資料が数多く収められ、その充実度には目を見張るものがあった。閲覧室は誰でも自由に出入りできる開放的な空間で、書庫から引き出した資料や比較的新しい演劇の専門書、複数の演劇雑誌のバックナンバー、高校演劇の戯曲などが読めるほか、机で勉強できたり劇場の関係者が打ち合わせに使っていたりと、多目的に使える場であった。ピッコロシアターの公共性の高さを象徴する空間であるだけに、平日とはいえ研修の間全く一般の利用者が見受けられなかったことは残念である。劇場内部の方々が利用することで市民にクローズドな印象を与えているのかもしれない。演劇の知に触れられる開かれた場としてより広く利用されることを願う。

次に、劇場職員の日常的な業務の体験として、ピッコロサポートクラブ会員や演劇関係者に送付する公演チラシ等の封入作業を行った。その部数の多さから、インターネット・SNSが普及する昨今だが、殊に演劇業界ではまだ紙媒体の力が大きいということを改めて読み取ることができた。

最後に中ホールにてピッコロ劇団による「火のようにさみしい姉がいて」を鑑賞させていただいた。中ホールは演者と客席の距離が近い小規模な劇場であり、迫力に圧倒された。嘘と真実、幻と現実が入り交じっていく独特の世界観もあいまって、アンデラ演劇のような雰囲気があった。

◆2日目

17：00～17：20 演出家・眞山直則氏との質疑応答

18：00～20：30 「火のようにさみしい姉がいて」観劇

2日目は「火のようにさみしい姉がいて」の演出家・眞山直則氏のお話を伺ったのち、同作品を再び鑑賞した。今回の作品は眞山氏の発案で上演に至ったとのことで、眞山氏は穏やかながらも熱のこもった口調で、劇の内容に関する疑問に答えるのみならず約50年前の作品を現代において上演するにあたって意識した点や演出意図、俳優と共に作品を作り上げるプロセスなど様々なお話をしてくださった。特に「信じられるものを積み重ねて信じたいものを表現する」という言葉が印象的であった。この日の夜公演では上演前に眞山氏とキャストの三坂賢二郎氏によるプレトークが行われた。2日目の観劇は眞山氏のお話とプレトークを経て初日より理解がクリアになったように思う。また、プレトークで場が温まったためか、ピッコロ劇団のファンが多かったのか、観客全体の盛り上がりも前日に比べて高まっていた。前日より劇中の笑い声が盛んに上がり、終演後の拍手も長く続き、前日は1回だったカーテンコールが2回行われた。2日続けて観劇させていただいたことで、舞台が回によって変わる生物であること、小劇場では演技や観客の反応における些細な違いが公演に多大な変化・影響を生むことを実感した。

◆3日目

14：00～15：00 ピッコロ劇団についての講義

15：00～16：00 別館(稽古場)見学、バラシ見学、日常業務体験

16：00～17：00 ピッコロシアターの役割についての講義

18：00～20：30 ピッコロ演劇学校授業見学

3日目は劇団部長・久次米様によるピッコロ劇団についての講義から始まった。ピッコロ劇団は、芸術性の高いものから子供向けの作品まで多種多様な公演と教育機関・自治体・企業などでの演劇指導やアウトリーチ活動などに取り組み、「芸術性」「地域性」「話題性」の三つをバランス良く重視して公立劇団として「芸術文化立県ひょうご」の理念を体現している。今後の課題として学校の授業数・生徒数の減少に伴い学校向けの公演や教育現場での演劇活動が減少していることが挙げられ、公立劇団として教育面により力をいれていきたいという意向を話してくださった。こうした学校公演や地域における多文化共生に向けたワークショップ、被災地支援に取り組む公共性の高さと、「空間」「人間」「時間」の3要素を重んじる組織の姿勢に強く惹かれた。

次に、ピッコロシアターの向かいにある別館を見学した。別館には劇団部の事務所

と稽古場があり、スタッフと俳優が和やかに同じ空間で過ごしている様子がうかがえた。劇場と劇団が一体で運営されている強みを感じた。続いて、この日千種楽を迎えた「火のようにさみしい姉がいて」の舞台装置等の撤去・解体作業を見学させていただいた。出演していない俳優を含め、総動員で手早くバラシを進めており、組織の連帯感が感じられた。その後、観客に配布したアンケート用紙・チラシ式の残部を解体し種類ごとに分ける作業を行った。

次に館長・石田様からピッコロシアターの社会的な役割についてお話を伺った。ピッコロシアターは兵庫県の文化施策である法人県民税の超過課税による施設整備の一環で「見ることよりも演じることに主眼を置いた劇場が欲しい」という声を反映して開設された公立劇場で、尼崎の文化都市としてのイメージアップに寄与している。ここでは文化庁からの助成金額が年々減少し、舞台制作費の削減や設備修繕の先送りなどに繋がりがねないという公立劇場の厳しい現状を伺った。

最後にピッコロ演劇学校の授業を見学させていただいた。ピッコロ演劇学校の強みは劇場・劇団との連携の強さだ。日頃から大ホールの舞台を使用して稽古をしたり、ピッコロ劇団の俳優から指導を受けたりすることができる環境は稀有である。演劇に取り組む若者がこんなにいるのかという喜びと、整った教育環境が非常に安価な授業料で提供されるにもかかわらずこれだけしか生徒がいないのかという悲しみの相反する感情が同時に襲ってきた。

◆4日目

14:00～15:00 鑑賞サポートについての講義

15:00～16:30 鑑賞劇場・ベイビープログラム等についての講義

18:00～20:00 ピッコロ舞台技術学校授業見学

最終日は、まず業務部の古川様より鑑賞サポートの取り組みについてご説明いただいた。ピッコロシアターでは音声ガイドやバリアフリー字幕、舞台手話通訳などの鑑賞サポートを提供している。大きな特色はピッコロ劇団員が字幕や音声ガイド台本を作成することにより、舞台の雰囲気合ったサポートができる点である。特に印象的だったのは、障がいのある観客への対応は特別なものではなく、対象者のニーズと劇場にできることの落としどころを探りながら相手を思いやって可能な範囲で最大限のサービスを提供するという、サービス業の基本に基づいたものであるというお話であった。

続いて、ピッコロシアターで行われるピッコロ劇団以外の公演やイベントについて業務部の有馬様からお話を伺ったのち、劇場の広報に関する意見交換を行った。ピッ

コロシアターでは文学座などの外部の団体の公演を誘致したり、寄席を上演したり、乳幼児も楽しめる音楽や表現のイベントを行ったり、舞台芸術に関するセミナーを開いたり、劇団公演以外にも多様な取り組みを推進している。こうしたプログラムの多様さも劇場の魅力になっていることを実感した。

4日間の最後には、ピッコロ舞台技術学校の多様な授業の様子を見学させていただいた。共通の基礎を学んだ後に美術・音響・照明の3コースに分かれる充実したカリキュラムで、第一線で活躍する講師の指導の下、劇場の機材を使って舞台技術を実践的に学ぶことができる環境であった。舞台技術に従事する人材が極めて不足しているというお話を伺い、裏方の魅力を発信する機会の重要性を痛感した。

◆全体を通して

4日間の研修を通じて、公立劇場の社会的意義の大きさを改めて感じる事ができた。また、同時にその維持における厳しい現状も学んだ。公立文化施設が市民に低価格で質の高い芸術を提供し、交流や文化創造の場として価値を発揮するためには、市民からの理解と国や自治体からの支援が不可欠である。そのためには、国や自治体により一層持続的な助成制度や人材育成の施策を充実させ、文化を社会の基盤として位置づけることと、ピッコロシアターの多様な施策のように施設側が積極的に地域と関わり、市民一人ひとりが文化活動の意義を実感できる仕組みづくりを進めていくことが重要だと感じた。また、インターンシップ研修を通じて舞台創造の裏側にある多くの人の努力と協働を知り、芸術を支える仕組みへの関心が一層深まった。将来は、文化や芸術と社会をつなぐ役割を担える人材になりたいと強く感じた。

最後に、研修でお世話になったピッコロシアターの方々に心からの感謝と敬意を表す。

劇場制作研修 受講生のレポート②

ピッコロシアターの取り組みと、公的助成金という課題

文学部人文学科 演劇学専修4年 佐藤夏那

令和7年9月30日(火)から10月3日(金)にかけて、兵庫県立尼崎青少年創造劇場(通称ピッコロシアター)のインターンシップ研修に参加した。4日間の研修では、プレトークも含め、清水邦夫作・眞山直則演出『火のようにさみしい姉がいて』を2度観劇し、演出家の眞山氏のお話を聞いた他、館長の石田氏をはじめ各部門の担当の方からピッコロシアターの沿革や取り組みについてお話を伺った。また、公演フライヤーの封入、配布用の挟み込みフライヤーの残部を整理する等の日常業務を体験し、『火のように〜』の舞台セットのバラシや、ピッコロ演劇学校・舞台技術学校の見学をした。以下にピッコロシアターの複合的な運営体制、バリアフリーへの取り組み、公的助成金の課題について順に述べる。

まず、ピッコロシアターの複合的な運営体制とは、劇場(ピッコロシアター)、劇団(ピッコロ劇団)、学校(ピッコロ演劇学校・舞台技術学校)の三位一体の運営体制である。1978年に県立劇場ピッコロシアターが開館した後、演劇に関わる人材の育成を目的として1983年にピッコロ演劇学校が開校した。ピッコロ劇団が1994年に発足し、1992年には舞台技術学校が作られた。ピッコロ演劇学校・舞台技術学校の魅力は、両校の卒業生を含め、宝塚歌劇団など関西を中心に活躍するプロが講師を務めていること、ピッコロシアターで実際のステージや照明、音響設備を使用して学べることである。現在、照明や音響は業界全体で人手不足であり次世代の育成が急務だそうだ。ピッコロシアターが演劇学校だけでなく舞台技術学校を運営していることで、新しい人材を現場に送り出すことに貢献している。また、二つの学校の卒業生がピッコロ劇団やピッコロシアターに就職し、今度は講師としてピッコロ演劇学校・舞台技術学校を教えるなど、ピッコロシアターの仕組みの中だけでも学校を起点に演劇を取り巻く人材の循環が生まれている。ピッコロ劇団は、小学校への「お出かけステージ」、中学校対象の演劇公演、子供向けの「ファミリーステージ」など、30名程度の劇団員で毎年様々な観客層に向けた公演を行なっている。公演に際し「県立の団体であるがゆえに、公共性と芸術性のバランスは一生の課題」というお話を研修を通して複数の方から伺った。ピッコロシアターの運営がうまく機能してきた背景には、歴代兵庫県知事や県議会、県民の理解があるという。それらの理解には、ピッコロ劇団が阪神大震災と同時期に創立された当初から演劇にできることを考え、小学校で慰問公演を行うなど地域と密接な関わりを持ってきたことが繋がっているのだろう。「お出かけステージ」の定番『学校うさぎ』は、今でも震災当時に小学校で巡業を観たと声をかけてくる観客もいるようだ。ピッコロシアターは、劇団と学校の運営の他に、貸し館業務や団体の招聘公演を主催している。また、ピッコロシアターは、資料室と閲覧室を館内に備えており、初代劇団代表であった秋浜悟史の愛読書を集めた「秋山文庫」を始め、演劇に関する資料を豊富に揃えている。特筆すべきは、ピッコロシアターが高校演劇の阪神支部大会会場になっている縁から長年高校演劇の台本を収集していることだ。高校演劇経験者の職員が、自分の現役時代にこういうものがあればとの思いから始めたそうだ。台本は上演年度ごとに製本され、学校名やテーマ、上演時間、役者の人数から索引で検索することが

できる。閲覧室に置いてあるため、利用登録さえすれば誰でも気軽に参照することが可能だ。演劇祭や大会に向け、高校生が自校の卒業生の台本や昨年度に観て気になった他校の台本を参考にしたり、台本の参照をきっかけに訪れた演劇部の顧問の間で交流が生まれたりすることもあるという。そもそも演劇に関する資料は国立国会図書館や早稲田大学演劇博物館（いずれも所在地は東京）等の大きな施設にしかないことも多く、高校の部活レベルの台本など何もせずとも残るものではない。他校のものはもちろん、自校のものでさえ生徒や顧問の交代に伴って確認が難しくなるだろう。そんな他の資料に比べても極めて残りにくくアクセスの難しい高校演劇の台本を整理して残し、演劇に関わる学生や教職員の交流の場を提供している点で、ピッコロシアターの台本収集の取り組みは素晴らしいものだと感じた。「三位一体+1」とでも言おうか、ピッコロシアターは、劇場、劇団、学校の三位一体の体制に加え、図書館や演劇アーカイブとしても重要な役割を担っていると考える。

次に、ピッコロシアターのバリアフリーの取り組みについて述べる。同シアターの木屋村氏から、バリアフリー化について「ハード面」の課題と「ソフト面」の取り組みがあると伺った。大ホールは前列の席との段差が大きく最後列からも舞台がよく見えるが、それは同時に座席にたどり着くまでに上り下りする階段の一段一段がかなり高いということでもある。ピッコロシアターはバリアフリーの概念が浸透するより前の時代に建てられた歴史ある建物であり、大規模な改修が難しいこともあって、観客層の高齢化に対して「ハード面」のバリアフリー化が追いついていない面があるようだ。一方で、同シアターは授乳室、手すりの設置された洋式トイレ、多目的トイレ、そして乳幼児おむつ交換ベッドを男女トイレ共に備えている¹他、車椅子対応のエレベーターも近年設置されており、改修が比較的容易な部分ではさまざまな客層を想定してバリアフリー化の取り組みが進められていると感じる。また、所謂「ソフト面」の取り組み、「鑑賞サポート」については古川氏からお話を伺った。視覚・聴覚障害者の実際の声を聞きながらより良いサポートを探っているようだ。主な取り組みとして、見えない・見えづらい方に向けてはピッコロ劇団員がリアルタイムで舞台の状況を伝える音声ガイド、聴こえない・聴こえづらい方に向けては舞台横スクリーンへの字幕の投影や舞台手話通訳がある。興味深い点は、同シアターの鑑賞サポートが単なる「情報保障」に留まらず「想像保障」を目指していることだ。例えば、字幕であれば文字のフォントや大きさ、アニメーションを工夫して文字情報だけでなく台詞や効果音の雰囲気までを伝えたり、音声ガイドは外部のアナウンサーではなくピッコロ劇団の俳優が音声を吹き込んでいる。いずれも作品に精通したピッコロ劇団員が台本を作成し、操作・ナレーションまでを担当することで、情報の伝達に留まらず舞台の雰囲気に合ったサポートを心がけているようだ。ピッコロシアターには事務方だけでなく俳優も積極的に鑑賞サポートに関わる仕組みがあり、シアター、劇団が一丸となって演劇を取り巻く環境をより良くしていく姿勢が感じられた。これまで劇場側の取り組みが遅れていたために、障害当事者はもちろん、その周囲の人間も共に出かける行き先にあえて劇場を選ばないという現実があるようだ。サポートを充実させることで、障害当事者だけでなくその周りの家族や友人らが演劇に触れる機会を増やせるというお話が印象的だった。また、観

¹ ピッコロシアター公式ホームページ「バリアフリー情報」〈<https://piccolo-theater.jp/guide/barrierfree/>〉(2025/10/30 閲覧)

客の高齢化が進んでいるというピッコロシアターだが、舞台横に字幕を投影することにより聞こえにくい高齢の方が作品をより理解しやすくなる等、鑑賞サポートの取り組みはユニバーサルの観点からも役立っているようだ。現在ピッコロシアター他で活躍されている舞台手話通訳士の方は、手話の他に演劇そのものを専門に学ぶため1年間ピッコロ演劇学校に通われたそうで、ここでもピッコロシアターの三位一体の体制が演劇の和を広げる役目を果たしている。

最後に、ピッコロシアターが直面する助成金の課題について述べる。同シアターの運営を行う「公益財団法人兵庫県芸術文化協会 兵庫県立尼崎青少年創造劇場」は「劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業」として文化庁から助成を受けている²。しかし、石田館長によると、近年同シアターへの助成金が削減傾向にあるようだ。理由としては、近年助成金の審査基準に「国際性」の評価項目³が追加され、国際共同制作や海外作品の招聘などが推奨されるようになったことがあるようだ。ピッコロ劇場は演劇を通じて地域と繋がること、三位一体の体制で演劇に関わる人材を増やすことを主体としており、現状のサイクルの中でそれがうまく機能している。助成金の審査基準⁴で言えば、「地域文化拠点機能」や「多様性とアクセシビリティ」の項目をよく満たしていると言えるだろう。そんなピッコロシアターであるが、意見交換会等の場で、基準を満たさないのであれば助成金額のより少ない他の枠組みへの切り替えを提案されることもあるという。実習中に何度も耳にしたお話ではあるが、観劇機会や演劇を学ぶ機会の安価での提供など、県立の公共劇場だからこそ助成を受けてできることがある一方で、それゆえに対応していかなければならない課題や満たさなければならない基準が存在するというジレンマを感じた。現在、同シアターはより多くの予算が振り分けられる劇団制作の方で舞台セットや衣装にかかる金額を調整することで助成金の削減に対応しているそうだが、予算が残らないため劇場や照明音響設備の修繕に手を付けることができずにいるようだ。設備の修繕は後回しにはできてもいずれ対処しなくてはならない問題であり、舞台制作にかかる金額を減らしていくことにも限度がある。このまま助成金の削減が続いたり、助成の枠組みが変更され助成金額が大幅に減少したりすれば、「地域文化拠点機能」や「多様性とアクセシビリティ」を実現している現状のピッコロシアターのサイクルも十分に維持することが困難になるだろう。「国際性」という新基準を十分に満たさないという理由で地域に根ざした演劇団体への助成を削減することは、果たして文化の促進に寄与しているのだろうか。

以上、ピッコロシアターの劇場制作実習に参加して考えたことを3つの観点から論じた。ピッコロシアターは地域と密接に関わり、劇場、劇団、学校の三位一体の体制に加え、演劇アーカイブの役割も担い、多様な世代が多様な方法で演劇を鑑賞し演劇に関わる場を提供している。また、地域に根差し、地域との関わりと自前の仕組みの循環の中で名

² 独立行政法人 日本芸術文化振興会「令和7年度文化芸術振興費補助金による助成対象活動の決定について」〈https://www.ntj.jac.go.jp/assets/files/kikin/joho/R7/20250331_hojyokin.pdf〉 p.14 (2025/10/30 閲覧)

³ 同上 p.28-30 (2025/10/30 閲覧)

⁴ 同上 p.28-30 (2025/10/30 閲覧)

実ともに演劇を開くことに貢献している団体である。特に、劇団員も積極的に関わったバリアフリー・鑑賞サポートの取り組みは、理想的なロールモデルとして多くの演劇団体が参考とすべきだと感じた。助成金の削減に関しては、国内の劇団や演劇団体には規模や特色を含めて様々なものがあり、一概に国際性やグローバル性といった新しい価値のみで測れるものではないということ、そしてピッコロシアターは長年地域に根ざした演劇の取り組みを続け、地域との関わりと循環という点で全国で類を見ないほどうまく機能していることを鑑み、助成の審査側には慎重な再考を促したい。

参考文献

- ・独立行政法人 日本芸術文化振興会「令和7年度文化芸術振興費補助金による助成対象活動の決定について」(https://www.ntj.jac.go.jp/assets/files/kikin/joho/R7/20250331_hojoyokin.pdf) (2025/10/30 閲覧)